

自閉スペクトラム症児における模倣認知と社会的行動

蒔田 恭子

自発的模倣能力は、言語や非言語コミュニケーションといった社会的能力の発達と関連する非常に重要な能力である。自閉スペクトラム症(ASD)児は自発的模倣に障害を示すが、その原因としてASD児の社会的注意の少なさが挙げられている(千住, 2013)。一方で、逆模倣(大人が子どもの行動をすべて模倣すること)による介入は、ASD児の模倣認知(自分が模倣されていることを認識すること)を促進し、社会的注意を向上させると報告されている(Nadel et al., 2000)。これらの知見を踏まえると、大人がASD児の行動を逆模倣することによってASD児の社会的注意が高まり、自発的な模倣行動が促される可能性が考えられる。しかしながら、これについて検討した研究はほとんどない。また、模倣認知行動には、模倣者に「模倣する意図」の帰属を伴わない行動(低次の模倣認知行動)と、模倣者に「模倣する意図」の帰属を伴う行動(高次の模倣認知行動)の2つのレベルがあるが、自由遊び場面での社会的行動を記録し、模倣認知行動との関連を検討した研究はない。そこで、本研究では、研究ⅠでASD児の自発的模倣および模倣認知の特性と、それらに対する逆模倣の効果を検討し、研究Ⅱで自発的模倣および模倣認知行動と集団療育場面での社会的行動との関連について検討した。研究はすべてA児童発達支援センターにて行われた。

研究Ⅰでは、実験的手法を用いて、ASD児および非ASD児の自発的模倣得点、模倣認知行動の生起率を算出した。各変数をASD児群と非ASD児群とで比較した結果、ASD児は非ASD児に比べ自発的模倣得点が低かった。この結果は、多くの先行研究の結果と一致していた(Chareman et al., 1997; Ingersoll, 2008)。一方で、模倣認知行動の生起率に差は無く、ASD児、非ASD児ともに低かった。したがって、本研究の結果からは、模倣認知における障害がASD児に特異的に見られる障害であるとは言えなかった。逆模倣条件群と随伴的反応条件群での比較を行ったところ、ASD児に対する逆模倣は、ASD児の低次の模倣認知行動を促進するが、高次の模倣認知行動や自発的模倣には影響を及ぼさない可能性が示された。さらに、ASD児の自発的模倣得点および模倣認知行動の生起率と心理アセスメントの結果との相関分析を行った結果、自発的模倣得点が高い児は共同注意得点も高いことが明らかとなった。

研究Ⅱでは、研究Ⅰで用いた実験場面での測定結果と、1人につき20分間の行動観察により算出した集団療育場面におけるASD児の社会的行動の生起頻度を用いて分析を行った。実験場面における自発的模倣得点と各模倣認知行動の生起率、および、集団自由遊び場面におけるIJA(Initiating Joint Attention:共同注意の開始行動)の生起頻度を算出し、相関分析を行ったところ、逆模倣を用いた相互交渉の中で、自発的模倣や他者の意図の理解を必要とする高次の模倣認知行動を示す児が、集団自由遊び場面でIJAをよく示すとは限らない可能性が示唆された。また、実験場面における自発的模倣得点と集団自由遊び場面における自発的模倣の生起頻度を算出し、相関分析を行ったところ、両者に相関は見られなかった。したがって、実験場面での逆模倣を用いた相互交渉の中で自発的模倣をよく示す児が、集団自由遊び場面においても自発的模倣を示すとは限らないことが示唆された。(比較発達心理学)